

仏教は近代に蘇生するか

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)

今日の資本主義文明を築いたヨーロッパが、キリスト教の強い影響圏にあった(ある)ことは、言うまでもない。近代社会が生まれるにあたって、キリスト教との摩擦や軋轢はひとかたならぬものがあった。けれどもそれは、母胎を喰い破るというみであって、キリスト教なしにそれが生まれなかったのは明らかだ。

それにひきかえ仏教は、だいたい情けない経過をたどっているように見える。発祥の地インドでは、ヒンドゥー教に呑みこまれ、とうに消滅してしまっただけでなく、脱カーストの思想として失敗したと言ってもいい。中国では、正統思想である儒教に押しつぶされてしまった。現実主義の中国人にとって、仏教は今日、漫才の種にさえなっている。日本ではどうか。いちおう全員が仏教徒だが、それは、切支丹・邪宗門でないことを幕府に証明するための約束ごとで、宗教の内実とはまた別である。結局、アジアの近代化と結びつくような、新しい運動を結実することはなかった。

○

キリスト教と仏教は、まことに対照的な運命をたどることになった。それには必然も根拠もある。

その鍵は、「法」に対する考え方の差異にある。宗教と社会の関係が、キリスト教と仏教ではまるで違っている。

この点をはっきりさせるため、*言語ゲーム論によって、問題を整理してみよう。

(1)社会は、さまざまな言語ゲームの絡まりあいでできている。(これを、社会=言語ゲームと書いてもよい。このアイデアについて詳しいことは、私の著書『言語ゲームと社会理論』(勁草書房)を見てください。)

(2)宗教は、何らかの自明でない前提を共有する言語ゲームである。自明でない前提(たとえば神の存在)は、意識的に選択されるほかない。そのため、社会のなかに、宗教を信じる一群の人びと(信徒)を出現させる。

(3)宗教のうちでも、特にユダヤ教・イスラム教は、社会の秩序(ルール)を再組織する戦略をもっている。新しい宗教上のルール(法律)を創設して、それに従う共同体をこの地上に生み出す運動である。

(4)キリスト教はこれに対し、宗教上のルール(法律)を守るべきだ、と考えるのをやめてしまった。社会の秩序(法律)を否定しないが、それに価値をおくわけでもない。地上の社会よりも、やがて来る神の王国が重要であると考えた。

(5)仏教は、これら宗教と異なり、社会の外に、社会を離脱した人びと(出家者)の集団を形成する。この集団(僧伽)は、ルール(戒律)によって社会と区切られているが、そのルールが労働を禁止しているため、自立できず、かえって社会に依存せざるをえない。(仏教を言語ゲームとして記述するアイデアについて詳しくは、『仏教の言説戦略』(勁草書房)を見てください。)

キリスト教は、ユダヤ教以来の宗教法を廃棄した結果、純然たる信仰の共同体に変容した。それは、どんな社会秩序(法律)とも両立できる。キリスト教徒にとって、社会秩序(世俗の法律)は人間(政治権力)が制定するものだ。これは、神の認める人間の権限だから、正當に制定された法律なら、それに従わなければならない。そして、正當な法律が存在しない場合、その制定を要求することもできる。この発想が、社会契約説や、市民革命の論理につながっていった。(イスラム教徒は、人間が勝手に法律を制定してよいというキリスト教徒の発想を、どうしても承認することはできない。ゆえに、近代化に激しく抵抗する、イスラム原理主義のような動きも出てくる。)

仏教徒には、社会秩序を誰かが「制定する」という発想が、そもそも欠如している。法(ダルマ)は、わざわざ制定しなくても、永遠不変のものとして宇宙(そして社会)を支配している。仏教の修行者たちは、その秩序(ヒンドゥー

的な輪廻の世界)を離脱することに究極の価値をおき、世俗社会の法律の及ばない場所に、別のルール(具足戒)に従う自分たちだけの小共同体(僧伽)を建設するのだ。

○

仏教の立場では、世俗社会(の法律)に対する態度が両義的とならざるをえない。一方で、社会のルールは否定すべきもの、そこから離脱すべきものである。しかし他方、それはそれなりに価値あるものである。なぜなら仏教徒は、輪廻を離脱する原因(善根)を蓄積する必要があるが、なにが善であるかは、世俗社会の価値規準によって定義されるから。僧伽になくてもならない「布施」にしても、そのような善の一種なのだ。

この差異は、仏教が知(覚り)に重きを置くこと、とりわけ知が個人のものであると考えることに基づくものだろう。仏教は、知が宇宙に遍満しているとみるが、ある条件さえ整えば、ひとり人間がそのすべてを完璧に覚りうる、と考える。しかもその知が、現実の現象に転化しようと信じた(法力)。このような知は、直接に他の個人と分かち合うことができず、通常の語法によって言表不可能とされるしかない。

仏教は、真理の言説を人びとのあいだに流布させるが、それはキリスト教の場合と異なり、真理そのものをするしたテキストではない。読み手個人個人の知に活かされて、はじめて真理としての条件をそなえるのである。

○

ここから法律ないし権力に対する、仏教徒特有の態度も生じてくる。仏教の知は、自生的なもので、外部から強制することに意味はない。戒は「具わる」のであって、制裁をとまなう法律(世俗法)とは無縁のものである。

キリスト教徒にとっては、神への絶対服従が価値である。だからもともと、制裁をとまなう法律に従うことに、宗教的な意味を認めてきた。この態度が、自分たち(市民階級)を世俗法に

明日への提言

よってコントロールするという、近代化の思想の土壌になった。

これに対し、仏教と権力との関係はどうか。社会(権力)と僧伽が互いに外在しつつ、布施/法施を交換しあうというのが、基本である。根本のところでは、世俗社会に無方針である。鎮護国家の思想は、その初期のスタイルを、大乘の要素、中国の要素を加味して変形したものだ。だから権力の求めに応じて、法力を発揮する仕組みになっている。

法力(仏教の社会的パワー)は、仏教の解き明かす因果律を人びとが信じる限りで、現実的な効果をもたらす。科学が普及した今日、その基盤はすでに失われた。

近代社会と仏教の論理は、このように、構造的に相容れない部分をあちこちに孕んでいる。ここに仏教の危機があるのではないだろうか。仏教界の宗教的天才が、この危機を受け止め、仏教を現代に通じる思想に再生させるよう願ってやまない。

*哲学者シ・ヴィトゲンシュタインの唱えた「言語ゲーム」の考え方を、社会学の研究に活かそうという試み。

◎プロフィール◎

橋爪大三郎先生(1948年生)



昭和47年東京大学文学部卒業。同大学院修了後、無所属で10年あまり研究・執筆を続け、今年3月から東京工業大学助教授。専攻は、理論社会学。著書に『仏教の言説戦略』『言語ゲームと社会理論』(以上勁草書房)『はじめての構造主義教』(講談社現代新書)『冒険としての社会科学』(毎日新聞社)他多数。